
機動戦士ガンダム ~ Please Tell Me Fact

08高校生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム〜Please Tell Me Fact

【Nコード】

N2427D

【作者名】

08高校生

【あらすじ】

時は宇宙世紀0079。両親が民俗学者の15歳の少年ロイは親の仕事の都合で太平洋に浮かぶ小さな孤島で平和に暮らしていた。しかし突然ロイに降りかかる戦争の影響は何も知らない彼から両親、友を奪っていく彼は何が起きてるのか、知りたい、大事な人を守りたい、そのための力がほしいそう思った。

プロローグ（前書き）

初投稿ですのでめっちゃ緊張しています。これから以後精進していきたいのでよろしく願います

プロローグ

宇宙世紀0078かな09年だったっけ何月だったっけ俺は本当に何も知らないガキだった。それもそのはずここは太平洋に浮かぶ小さな島、民俗学者の両親につき合わされたとはいえどうしてこんな島に俺が連れてこられなきゃいけないんだよ。ま、ガッコも行かなくていいって喜んでたし、言葉にも不自由してないしテレビもゲームもないけど楽しいなって思い始めた頃。この頃に戻れたらどれだけよかっただろうか・・・

第一話：死の雪が降る日

ここは太平洋に浮かぶ世界地図にもその名前は載っていない小さな島。名前は現地の発音で「ウィー・カイ・フィー」という。

ウィーはこの地方に伝わる緑色の巨人、カイは創造するという意味でフィーは島ということらしい。伝説によればこの島は緑の巨人が運んできたといわれている。

宇宙世紀0079一月四日、朝

「おい、ロイ起きろ狩りに行く時間だぞ」

「分かってるよ着替えたらすぐ行く」

「なあ．．やっぱりこれを着るのか？」

少年は目の前に出された服はここは本当に宇宙世紀か？と目を疑うようないわゆる民族衣装である。

「この間は喜んで着とっただろうが」

下を見ると自分の父がその服を着ているしかも股間にはいわゆるペニスケースなるものまで付けている。

「俺が五歳のときだろ、珍しかっただけさ、なあ今って宇宙世紀何年だ？っていうか、何世紀昔のファッションセンスだよ」

さすがに年頃の男の子には恥ずかしい格好だ。というよりこんな格好を平気のできる父にロイはある意味すごいと思ってる。

「これはこの地方での狩りに行くときの正装だ、いつもいつてるだろ」

父も白人系の人間だが、毎日こんな格好をしているせいで今では現地の人間と変わらない肌の色をしている。そもそも彼の父親は地球^{アースノイド}至上主義者であるそんな彼の論文には「いずれ、すべての人類が宇宙へ行かなくてはならないときが来るだろうしかし私たちは地球にはこれほどうばらしい文化があるということを忘れてはいけない。」と書いてあるが、ロイに言わせればそれがこの格好か？ということだ。

ロイは七歳までこの島で暮らしていたが八歳の誕生日になる前、ロイは熱病にかかってしまい彼は十四歳まで親戚の家に預けられてしまった。なので、ロイはこの島の言葉と英語の両方を使えていたがこの島の言葉はもう使うことができない。しかし、この島のポラントエアで学校の先生や医者をやっているロイの母親、ジェシー・ビーバルスのおかげで今ではこの島のティーンエイジャーは英語を話すことができるようになったのでロイはあまりよと場には困っていない。

「さあ、行くぞ。おい、ロイどうしてその服を着ない？」クリストファーが聞くと

「何でこんな格好しなきゃいけないんだよ、母さんメシいらなから遊びにいつてくる。夕飯には帰ってくるよ」ロイはジャンパーをあおって出て行った。

しばらく走っていくとこの地方独特のこんがりとした茶色の肌をして真っ黒な髪の毛をみつ編みにした女の子とあった。彼女もジェシーの生徒だ

「ロイ、オハよー」

「おはよ、チャ」

「また狩りサボってるんだ、この怠け者」

チャはからかう様に言った。

「うるさい、何で宇宙世紀にもなってこんなことしなきゃいけないんだよ」

「仕方ないでしょ私達はまだこれ以外のことで食べていけないんだから」とチャが言った瞬間突然風が吹いた。

二人とも5メートルくらい飛ばされそうな強い風だったがロイが彼女を押し倒し二人とも怪我はなかった、だが彼は不覚にもやわらかいと思つてしまった。初めて触った母親以外の異性の体は想像以上にやわらかくそしてあまりにも近すぎて思春期の少年には刺激が強すぎた、ロイは自分の下腹部に異常を感じた

「大丈夫か」

今更カツコもつかないがロイは気まずさをこまかすために言った
「うん、大丈夫だけど、ロイ、その、重い」チャが恥ずかしそうに
言った。

「あ、わ、悪い、す、すぐにどくよ」ロイも少し恥ずかしかった。
気まずい沈黙、二人とも互いをこんな風に意識したことはなかった、
お互いがお互いをずっと子供だと思っていた、恋愛感情なんかこれ
っぽくもなかったのに、なぜか心臓の鼓動が激しくなる、お互いが
自分の感情を疑った。そんな二人をよそに突然冷たいものが顔に当
たった。

「冷たい、これは何？」

チャは驚いた雨ではないしかも雨ならこの島はスコールしか降らな
いのこの白く冷たいものは異常でしかなかった。

「雪・・・」ロイはつぶやいた。しかしロイは目の前の光景を疑っ
た、なぜならこの島に

雪が降るなどまずありえないことなのだから。空はドス黒くまるで
地獄の始まりのような色をしていた。

「雪ってあの雪？あの寒いところにしか降らないっていうあの雪？」
チャは聞いた。

「ああ・・・」ロイはいまだに現実を受け入れられなかった。

「これが雪・・・冷たくて気持ちいいー」チャは子供のようにはし
やぎっぷりを見て何も考えないことにした。

時は宇宙世紀0079一月四日、コロニーが地球に落ちた日。

第一話：死の雪が降る日（後書き）

なかなかMSが出なくてすいませんが気長に待つただけると幸いです。なかなかようやくブリティッシュ作戦が終わりました。この後、ロイヤチャがどうなるか楽しみにしていただけるとうれしいです。

第二話：両親の死

雪の日から数日たった。なのに太陽は出てこない。海を見ると魚が腹を上に向けて寝ている。

また雪だもう誰も珍しいと思ってみる人はいない。島の長老達は何かの儀式をしている。

島では下痢、吐血、で死んでいく死の病が流行した、そして死んでいく人々のほとんどが髪の毛がすべて抜け落ちて死んでいった。

実はこの症状に近いものが過去にあった、それは第二次世界大戦で原子爆弾を投下された後のヒロシマ、ナガサキと同じ原爆症である。コロニー落としの爆心地はさぞ酷い物であったのだろう、爆心地のひとつのシドニーからかなり離れているこの島でもこれほどの放射能の被害があるのだから。

「親父いったい何があったんだ、外の雪はやむ気配ないし、昨日だつてブグ、ケダ、ニホが下痢と吐血で死んだ。病院に連れて行きたいやつもいるのに、何がどうなつてんだ」

ロイはパニックだった、無理もないだろう、数日前、降るはずのない雪が降つたと思つたら友達や知り合いがコロコロ死んでいった、魚も腹を上に向けて死んでいる。

こんな状態を理解することができる人間がいるものか。

「私だつて聞きたいさ」

「だが、外と連絡も取ることもできない、それに私は民俗学者だ医療に関してはお手上げさ」

「いつも偉そうなこと言ってるくせに肝心なときには何の役に立たないんだな」

ロイは吐き捨てるように言った

「落ち着きなさい、ロイ」

母、ジェシーだ。

「あわてても何もおきません。あなたはもう三日も寝ていないので

すよ少し休みなさい」

ジエシーはスープをロイに勧めた。ロイはひつたくるようにそれを飲んだ。

「そんな悠長なこと言っている場合か、こうしている間にも．．．」
バタツ、ロイは倒れた。

「母さん、ロイが」クリスは焦った。

「安心してください」

「睡眠薬が効いただけです、これで少しは落ち着くでしょう」

「情けない、こんな時、私は何もできない」

クリスは申し訳なさそうに言った。

「それに君こそ一週間くらいまともな休息を取っていないだろ」

「いいえ、ミトカと交代でやっているからなんとか」

ミトカというのはこの島唯一の医者である年齢はもう120歳をこえている老婆である。

「彼女は私なんかよりもずっと働いてるわ。今から一時間だけ寝ます、一時間たったら起こしてください．．．」

そついい終わる前に彼女が倒れた。

そして、彼女がおきることはなかった。

「すまん、ロイ．．．おまえの母さんを救ってやることができ．．．」

「分かっていきますミトカ先生．．．母さんは疲れたんだ、だから少し休んだだけだったんです」

「ロイ、その．．．なんていつたらいいか分からないけど、そのジエシー先生は」

チャは大泣きしていた他のみんなもそうだった、それだけ彼女は立派な人間だったのだらう

「ありがとう、チャ、そして皆さん、今日は母のために集まっていたけど、彼女の魂はカイ様のもとへ召されるでしょう」

こうして彼女の葬式は終わった。

その日の夜、

「ロイ．．．すまなかったな、お前をこんなところに連れてきて、サイド2ではそろそろ正月かな？」

ロイは何も言わなかった、いや言えなかった。十年間、会いたくて会いたくて仕方がなかった母さんが、やっと会えた母さんがもう．．

．
クリスもそれ以上は言わなかった。

次の日、ロイの父のクリスが自分の頭を銃で撃って死んでいた。
もうその姿を見ても彼は何も感じなかった。

第二話：両親の死（後書き）

またMSが出てきませんでしたorz

僕は飯田先生の「空のイシユダム」が大好きなので

地球から見たブリティッシュ作戦について書いてみたかったです。
つまらない作品ですが読み続けていただけるとありがたいです。

第三話：ザクの襲来

両親の葬式から一月ほど立った。

ここ数日、ロイは誰とも口をきいていない。

みんなも彼にかける言葉はなかった。

その沈黙を破って最初に話しかけたのはチャだった。

「ロイ、こんばんは、流れ星がいっぱい流れてるよ、見に行かない？」

「いい．．」

「そう．．」

気まずかった、どう声をかけても目の前の少年は殆ど答えてくれなかった。

「ロイ、いい加減にしなよ、何時までめそめそしてる気？そんなじゃおじさんもおばさんも」

「わかってる、だが、悪い、今、誰とも話しをしたくない。」

「うん．．でも最近、ロイ、人が変わったね」

あんなに嫌がってた狩りも行くようになったし。あんだだけ抵抗があったのに．．」

「もう．．あんなカツコしなくてもいいから」

「そう．．」

そのとき山のほうで大きな音がした。「何か落ちたみたい行ってみよ」

「ああ」

二人は山に向かって走った。

少し走って近くまで来た。頂上より少し低いところに何か岩のようなものがあつた。

「あれっていんせき．．だよな」

「ああ．．そうじゃないかな？」

二人とも目を疑った、近くで見るとその隕石は全長約20メートル

くらいあつたからだ。

突然、岩が割れたと思うと中から緑色の巨人が出てきた。

そのときロイは、サイド3のハイスクールに行った友達からもらった写真を思い出した。「いや．．．あれってもしかしてMSモビルスーツって奴じゃ」

「もびるすーつ？なにそれ？」

「宇宙のサイド3ってところで作られた作業用の機械って聞いたことが．．．」

「それが何でこんなところに？」

突然巨人の胸のところが開いた。

中から人が出てきた。

「ここが地球か．．．俺はついにじいちゃんの故郷の地球に来たんだ」
男の声だ、宇宙移民者のロイには彼の気持ちがよくわかった。

「マリク中尉、命令があるまで勝手に外に出ないでください」

「いいじゃねえか、レベルカお前も地球は初めてだろ、しかし、体が重いこれが本物の重力か」

たしかにこうしてみると二体の巨人が喋っているようにも見える。しかし、何故そんなものがここにいるのだろうか、ロイにはさっぱりわからなかった。よく見ると巨人には緑のものとオレンジ色のものがあつた。

緑のほうは銃を持っていて、オレンジ色のほうは大きな掃除機のような物をもっていた。しばらく観察しているとまた緑の巨人が出てきた、そいつは斧を持っていてマシンガンの奴に比べると少し小柄だった。

「これが地球かようやく来ることができた」

「少佐も少佐です、一応無人島だっけ聞いていますが万が一の事をかんがえて」

「おー怖、中尉のヒステリーだ」

「アレ、長いんですかね」マリクがからかうように言った

「マ、リ、ク、女性に対するセクハラは軍法会議ものよ」レベルカ

はまるで小さな子どもでも叱る時のような声で言った。

「しかし変ですよねヨコヤマ少佐。」マリクは気まづくなったのか話題をすり替える。

「何がだ」

「ここは常夏の島だって聞いたのに雪が降りそうです」

「あれの影響だろ」ヨコヤマ少佐は呟くように言った。

「仕方ないですよ、我々と連邦の戦力差を考えれば・・・」レベッカも同意だった。

自分達のしている事がたとえテロリズムだったとしてもスペースノイドの独立のためには仕方がない、悪いのはコロニー落としを防ぐ事が出来なかった連邦だ、そう思うことにしている

「少佐、ミノフスキ-粒子散布完了しました」

「ご苦労、今から俺が見張りをしよう、なれない地球の重力で疲れただろう」

「少佐こそ、お休み下さいここは私とが」

「そうですね、どうせ無人島です、自分とレベッカだけで十分ですよ」

「スマンな、では、ふたりとも3時間だけ頼む」

「了解」

二人のザクは敬礼した。

「どうしよう、みんなに知らせなきゃ」

「チツ、霧がでてきた」

突然、一機の巨人がマシンガンを乱射した。

爆音が響く

「悪い手がすべった」

「マリク気をつけてよね」幸いオレンジの巨人には当たらなかった。

「チャ大丈夫か」

チャはその場に座り込んでしまった。よくみると失禁している。

「立てるか？」

答えはかえって来ない、ロイもチャの存在がなかったら同じ事にな

つていただろう

「落ち着け、深呼吸だ、」ロイは息を大きく吸いそしてはいた、
「チャもやるんだ、早く」しかし彼女はまだ固まっている。

ロイは彼女の頬を二回打った。

「痛い」

「しつかりしろ、そして立て、出来るな」

チャは首を横に振った。

「わかった、俺の背中へのれ」チャは言う通りにした少し背中が冷たかったが気にせず走った。

「よまずは村へ戻るぞ、次のことはみんなで相談してきめるぞ」

ロイとチャは大急ぎで村に戻った。

「みんな、聞いてほしいことがある。」ロイがそう言うと村のみんなが集まった

「さつき、山に何か落ちたような音が聞こえたよな」村のみんなは頷いた。

「あれは、宇宙そふから来たロケットだ」

「なぜ、こんな所に」

「何か目的があるのか」

村の人間が騒ぐのを静止しながらロイは言った。

「悪いが詳しいことは、殆どわからない、しかし一つだけ言える事がある、戦争が俺達の知らない所で始まっている。」

「戦争だって」

村の住民はまた騒ぎだした。この島は今まで戦争や紛争に巻き込まれたことがなかった。村人の殆どが遠い世界で起きていて自分達には関係ないものだと思っていた。

「この間流行った疫病は実はこの戦争が関係していると思う」

「ロイ、何かの間違いじゃないのか」

「ああ、残念だが、俺は死んで行った両親や友達の仇をとりたい」

ロイは村人に訴えた

「頼む、どうしてもみんなの仇をとりたいんだ、そのための力を貸

してくれ」ロイは頭を下げた、すると白いくて長い髭を持つ老人が出て来たこの村の長老だ

「あの二人はワシらの恩人じゃ、あの二人の息子のお前の頼みを断ることなど出来んよ、なあ、みんな」

村のみんなが頷いた。「ありがとう、みんな、作戦はあいつらが重
力に慣れるまでに成功させなければならぬ、つまり明日の晩に襲
撃をかける、今ある槍や弓では相手にならないが戦いかた一つでど
うとでもなる。必要な物のリストを作った、もし何かあつたら相談
しよう」

ロイは、正直怖かった、だが仲間がいるのは心強かった。

交戦

ここは島の中心部にある休火山、昨日、二人が巨人とを見た場所である。

「ねえ、ロイ、本当にやるの」

「ああ、今日しかない」

「人を殺すんだよ、やっちゃいけないことなんだよ」

「なら、奴らに従属するか？ここが奴らの植民地になるんだ、さぞかし愉快だろうな」

ロイは皮肉を込めて言った。

「それとも、お前まだビビってんのか？」

「そ．．．そんな事ないよ」

彼女の膝は笑っていた。

「いいか、作戦通り行くぞ、本当に怖かったら今のうちに逃げろ、今度は小便漏らしても助けてやれないからな」

「わかったよ、もうそのことは言わないで」

チャは頬を赤く染めて言った。

チャにはああ言ったものの実際ロイもかなり怖かった。

出来る事なら逃げ出したい本当に作戦は成功するか、しかし、今やらなかったらまた友達を殺される、戦争がなかったら自分の両親は死ななくてよかった、だから、もう誰も失いたくない失う位なら奪ってやる。友人と両親の仇を取るその時まで絶対に死なないそう誓った。突然、一体の巨人が倒れた。

「よし、チャ閃光弾を上げろ、色は赤だ」

「了解」

ここはジオン軍、実験部隊基地、そう昨日彼らがであった巨人の基地だ。

もともと彼らの役割は、地上でのモビルスーツ運用のテスト部隊で

ある。

のちにモビルスーツの圧倒的な戦闘力で圧勝と書かれているオデッサ攻略戦も、その消耗はかなりの物であった、そのため、地上戦のエキスパートを育成するための部隊を編成した。しかし、まだオデッサでの人員や物資の消耗も激しく結局、約五十人モビルスーツ三機という少な過ぎる部隊になってしまった。

あと、この島はハワイを攻めるための重用拠点の役割も果たしている。

「おつ、マリク腕をあげたな」

「へっ、隊長こそ重力にやられてるんじゃないんですか。」

二人の巨人は互いの斧をぶつけ合う、マリクの巨人が唸りをあげて痩せ型の巨人を攻める。しかし巨人はランドセルのバーニアを噴射し後ろに下がる。

「げっ！」

マリクの巨人は傾いたそれを痩せ型は見逃す事なく胸を目掛けてタックルをかました。「重力にやられてるのはお前だよ、バカ」ヨコヤマ少佐は吐き捨てるように言った。

「おい、レベツカ、お前のいとこのいとこのダーリングがのびてるぜ早く介抱してやれよ」

「少佐からかわないで下さい」とレベツカが言ったその時だった。

突然白い煙が上がった。

花火、と思っただけだった。

自分の視界を白い光が塞いだ。

そして、突然彼女の胸を痛みが襲った、しかしその痛みは感じなくなっていくむしろ快楽すら感じる。

眠気に襲われる、眠い、寝てはいけないのに。

まだ試作兵器の組み立ても終わってない、雑誌で見たサイド3で一番おいしいケーキをまだ食べてない。

「マリク……」

そして、恋人のプロポーズの言葉を聞いてない。

「レベツカー」

隊長の声も聞こえないきつと夢なんだ、そうだ夢なんだよ、じゃあね、マリク、少佐また明日。

「マリク、レベツカが、やられた、ここはゲリラの島だったんだ。」
「レベツカが」

と言った瞬間突然ハッチが開いた、何者かに強制開放ボタンを押された。

「ガキ・・・」

マリクが見たのは自分の弟位の少年そしてその少年は自分に銃を向けている「死ぬ」

ロイが撃った弾はマリクの額に当たった。マリクは倒れた。

しかしロイの目的は巨人の奪取そして反撃だ。

コックピットのマリクを外に捨てチャを中に入れた。「ロイ、動かせるの」「黙ってるよ」

「ロイ手がふるえてるよ」

「うるさい」

「ゴメン」「い、いくぞ、」

ロイはレバーを押した、機体が起き上がった。

幸い演習中だったため狙いは目の前の巨人についていた。

「マリクか、ゲリラを掃討する、援護しろ」

しかし、返事がない。

「おい、マリク返事をしろ」

ロイは無我夢中でアクセルのようなものをふんだ。

コンピュータはそれをタックルと判断しタックルの姿勢をとる。

「マリク、演習は終わりだ。」ロイの巨人は後ろのバーニアを思いきり噴射して体当たりをかけた。

目を開ける事が出来ないくらい速い。

「クッ」

「きゃあー」

タツクルは敵の巨人に当たった。

しかしロイの巨人はバランスを崩して敵を巻き添えにして倒れてしまった。

ロイは巨人からおりた。

そしてコックピットの強制開放ボタンを押す、そして先程ジオン軍から奪った手榴弾を投げる。

手榴弾はすぐに爆発した。

「きゃあー」

「チャ、どうした!」

「オエエー」

チャは嘔吐した、それほど無惨なものだったのだ。

ロイは背中をさすった。

「ロイ、怖いよ」

「ああ、俺だつて」

その時、青い花火が上がった。

これは、作戦成功のときに上げるための物だ。

「やったぞ! 勝ったんだ」

「こつちも青を上げるぞ」

「うん」

現場は酷いものだった。

確かに、夜襲、閃光弾を使った奇襲、重力に慣れていない体悪条件とはいえ彼らは軍人である、ゲリラとはいえ素人が無傷で帰ることなど不可能なことくらい、ロイやみんなにも分かっていた。

しかし、ロイたちは死体のだす、臭い、血まみれの大地を見た。

「ジエロ、ジエロおじさん」

「ああ、チャか、俺達は勝ったんだぞ」

「う、うん」

「巨人はどうなった。」

「ロイが、ロイが捕まえたよ」

「そうか、それはよかった、やっぱり外のやつは違うな、お前も外

を見てこいよ、いい女になれ」

血まみれの男はぐったりと倒れた。

「ジェロおじさん、ジェロおじさん」

その近くで中年の女がジオン兵の死体に向けてナイフを何度も何度も刺している

「よくも、よくもあたしの子を、この村一の孝行息子と呼ばれたあたしの子を」

「イデアおばさん、やめてよもうその人死んでるよ」

「チャカイあたしの子は死んでないよね、コイツをあと百万回刺せば生き返るんだよね、アハハ、アハハ、アハハハハハハ」

「気が狂ってる」

ロイは思った。

自分もおかしくなりそうだ、逃げる、足が動かない、吐きそうだ、誰か助けてくれ、そう思っていると、突然誰かに肩を叩かれた

「ロイヤ。」

振り向くと白髪頭の老人が立っていた。

「長老、生きて」

「ロイヤ、しつかりするんじゃない」

「俺は、俺の俺で決断がこんな事に」

「落ち着くんじゃロイ、誰もお前さんを責めんさ。」

「ワシらは運が悪かったんじゃない、とてもな」

「しかし、しかしそんなんですむわけがないじゃないですか」

「仕方なかったんじゃない、いずれこうなる事だった、今はどうやってこの村を復興させるか考えよう、それには若者の君達の力が必要なんだよ」

「はい、長老」

ロイは泣き崩れた、老人はそんなロイの肩を叩しつかりと抱いた。時に宇宙世紀00792月8日まで、地球降下作戦の始まる一月前である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2427d/>

機動戦士ガンダム ~ Please Tell Me Fact

2010年10月11日21時27分発行